

「土」——野菜を育ててきて——

石黒 逸子

私は、東京に生まれて、十七年前大学卒業と同時に、イスラエルのキブツ（農業生活共同体）に一年間研修に出かけました。そこで初めて農業体験をし、「土」に触れました。イスラエルの自然は厳しくて、イリゲーション（灌漑）をして、荒地に作物を栽培します。人間の力で水を撒かなければ成り立たない農業でしたが、そんな中で果樹を植え、野菜を育て、動物を飼う人々の生活に融れて、すっかり農業に魅せられてしまいました。「土」に生きる厳しき、暖かき、優しさを肌で感じました。

数年後、研修で知り合った夫と結婚し、長男の誕生を機に、茨城県大宮町の知人の養鶏場に移り住んで、十二年になります。

夫の仕事を手伝いながら、農場の近くの空地を少しずつ開墾して、野菜を作っていました。鶏ふんを利用して、畑を耕しています。

毎年二月になると、温床に夏野菜の種を蒔き、ビニールでおおいます。その一



粒、一粒が、いまだ弱い日ざしの中、「新しいいのち」をゆっくり土の中からのぞかせます。双葉が出、続いて本葉が出て、ゆっくりゆっくり育っていきます。太陽と水と土が野菜を育てていきます。

四月になると、あたりの草木が息づいてきます。うぐいすも鳴き初め、私の心も体も躍り始めます。もう、じつとしてはいられなくなりそうです。今まで、ビニールで囲われていた野菜の苗を、寒さに強い順に、畑に降ろしてやります。苗が畑に根を張り出すと、毎日のように伸びるのがわかります。また、その頃には、野菜に負けじと、全ての草もぐんぐん伸びてきます。子供たちと一緒に畑に連れ出し、草を取り、間引をし、支柱を立て、土寄せをして、夏の収穫を待ちます。

子供たちも、土に触れ、野菜や草の息吹きを感じ、働いて汗を流して、みんなのできた野菜を味わいます。とれたての野菜は、いうまでもなく、みずみずしくおいしいものです。

現在は、「食べ物」が単なる「もの」のような扱いをされ、「食べ物」が「いのち」あるものだったことが、見えにくくなっているようです。「土」はいのちを育てます。野菜や草を育て、そして動物を育てます。それを、私達が食するのです。また、私達が、動物たちのふんや、木の葉や野菜や草の余りを土に返します。いのちが循環しています。

また、動物を飼っていると、いのちの営みにも出会えます。鶏が卵を生む瞬間を見たり、山羊のお産を目のあたりにすることもあります。お産の瞬間には、同じ子を生むものとして、思わず共感したものでした。

これからも、「土」に触れながら、太陽や風や雨や草木につつまれて、暑いな、寒いなと肌で季節を感じながら、ゆっくりと自然の中で暮らし続けたいと思います。

(奥村ファーム)